

古代日本語における語頭子音の脱落

山口佳紀

一

古代日本語の語音構造がCV構造を基本とし、そのために母音の連続が避けられたということは、これまでにもしばしば指摘された所である。その具体的な現われとして、複合語の構成に際して母音連続の生じた場合は、次の三つの方法によって、母音連続が回避されるということが言われている（大野晋「万葉時代の音韻」万葉集大成・言語篇）。

三つの方法とは、次の三者である。

- (イ) 母音転成
- (ロ) 母音脱落
- (ハ) 子音挿入

(イ)母音転成とは、タカイチ（高市）√タケ（乙）チのように、二母音が融合して、もとの二母音のいずれとも異なる一母音を転成する場合である。(ロ)母音脱落とは、ワガイモ（我が妹）√ワギモのように、連続する二母音のうち、いずれか一方が脱落することによって、一母音となる場合である。(ハ)子音挿入とは、ハルアメ（春雨）

√ハルサメのように、子音を挿入することによって、母音連続を遮断する場合があるのである。ただし、右のうち、(ハ)のような現象を子音挿入と解するには、幾つかの疑点があるようである。

まず第一に、(イ)(ロ)(ハ)の相互関係が問題になる。右の三者は、一般に、共時的に生起する現象というふうに着せられているようであるが、そうだとすれば、いかなる場合に(イ)が起り、またいかなる場合に(ロ)が起り、またいかなる場合に(ハ)が起るかという、相互の関係が問題にされなければならない。

筆者は、すでに別の所（「古代日本語における母音脱落の現象について」国語学85）で、(イ)と(ロ)との関係について考察し、(イ)と(ロ)の差は、通時的な新旧の差であると考えた。すなわち、(ロ)母音脱落は、上代にその例が多いのに対して、(イ)母音転成は、上代にすらすでに例が乏しいのである。ただし、母音転成の存在そのものは、疑うことができないようである。従って、母音転成を母音脱落より一段階古い方式というふうに着せることが穏当と思われる。

一方、(ハ)子音挿入は、その例とされるものが余り多くない上に、(イ)や(ロ)との関係について、適切な解釈が与えにくい。

子音挿入という解釈を妨げる第二の理由は、そのように解した場合、音韻論的あるいは音声学的な必然性が考えにくいということである。

子音挿入の類例として、

佐観 (万葉三八二七)

を挙げることがある。これは「采」の字音であるから、

sai > saje

の音韻変化が行なわれたのであって、母音連続を回避すべく子音が挿入されたものと見るのである。これに似たものとして、「才」が平安朝において「ざえ」と読まれている例を挙げることができる。これは、

zai > zaje

の音韻変化を示すものであろう。

いずれも、日本化した字音と思われるが、その過程は、

sai > sae > saje

zai > zae > zaje

のごとくであると考えられる。~ai > ~ae については、狭母音 i が a のような広母音の直後にあるために、これに同化されて中広母音 e に変わったものと考えられる。~ae > ~aje については、日本語の CV 構造のわくが強く影響しているであろう。すなわち、母音連続を回避する意味から、e と音感上類似した je がこれに取って代ったものと考えられる（もっとも、上代において、e と je とが音感上類似していたであろうということは、両者が同一音韻に属するという後代の事実から逆に推量するはかはない）。

右の類とは別に、

陶タヲ (沙門勝道歴山堂玄珠碑平安初期点)

軒昊カヲ (大唐三藏玄奘法師表啓平安初期点)

簾 (世) 乎之不江 (天治本新撰字鏡)

芭蕉 發勢平波 (和名抄)

などの類が考えられる。これらは、

tau > tao > tawo

gau > gao > gawo

seu > seo > sewo

のような過程が考えられるのであり、広母音 a や中広母音 e の直後にある狭母音 u が、同化されて中広母音 o となり、更に CV 構造のわくが働いて、o と音感上類似した wo に取って代わられたものであろう。

すなわち、右のような類は、いずれも、広い意味で子音挿入と呼べないことはないけれども、それにはそれなりの必然性が考えられるのである。

もう一つ関係のありそうな現象として、後代における次のような現象が想起される。

見合 niai > niiai

具合 guai > guwai

しかし、これらは、狭母音から広母音に移る際に、いわゆるわたり音が発生し、これが挿入子音となったものである。

これに対して、ハルアメ > ハルサメにおいては、子音 s が挿入される必然性が考えられるであろうか。たしかに、子音 s が挿入されれば、母音連続は回避することができる。しかし、それだけであれば、挿入される子音は、何も s でなければならぬ理由はない。

ここでは、s が挿入される音韻論的あるいは音声学的な必然性を想定することが、極めて困難なのである。

二

一体、子音挿入と解される例は、どのくらい存するのであろうか。また、挿入子音の種類はどのくらいあるのであろうか。

この点については、すでに浜田敦「古代国語に於ける挿入的子音」(人文研究一卷七号昭和25年7月)が詳しい。ここでは、浜田の論を参照しつつ、比較的确实と思われるものを、上代・中古に例の存するものに範囲を限定して、列挙することにしたい。

まず力行については、

(1) ウマコリ(味織)

味凝(万葉一六二)

味凍(万葉九一三)

が挙げられる。アヤにかかる枕詞で、ウマキオリあるいはウマクオリの約というふうの説かれているが、ウマシが複合語を作る場合は「ウマシ」ないし「ウマシシ」となるのが普通である。ウマオリに子音kの挿入されたものと見るのがまだしも優っているであろう。

次に、サ行については、次の例がある。

(2) (i) ハルサメ(春雨)

波流佐米(万葉四一三八)

コサメ(小雨)

轟 古作女(天治木新撰字鏡)

ハヤサメ(早雨)

波夜佐雨(出雲風土記)

ムラサメ(村雨)

白雨 無良佐女(和名抄)

(ii) ツキシネモチ(春稲持)

都伎之禰毛知(琴歌譜)

ミシネ(御稲)

見之禰(神楽歌・細波)

ウルシネ(稷稲)

粳米 宇留之禰(本草和名)

トツカシネ(十握稲)

十握稲トツカシネ(圖書寮本顯宗紀)

(iii) カタシハ(堅磐)

堅磐 柯陸之波(雄略紀)

(iv) ミソコナハス(見行)

不觀ミソコ(ナハサ)(東大寺諷誦文)

見 ミソコナハシテ(飯室切最勝王経注釈平安初期点)

以上のうち、(i)(ii)(iii)は浜田の論で触れられている。(iv)は従来、ミシオコナハスの約と説かれているが、ミルの尊敬体であれば、ミスよりもメスとなるのが普通である。ミオコナハスに子音sの挿入されたものと考えるのが優っているであろう。

次に、タ行の例としては、次のものがある。

(3) ココツゴク(心動)

許己呂都呉枳て(万葉四〇八九)

これも、すでに浜田の指摘する所である。

次に、ナ行の例としては、次のものが考えられる。

(4) (i) ナニモ(汝妹)

汝妹 舞通毛 (履中紀)

(ii) ニヒナへ (新經)

尔比那閨夜 (古事記・雄略)

(i)は普通、ナノイモの約と説かれている。けれども、ナ(汝)を含む複合語は、ナセ(汝兄)・ナネ(汝姉)・ナオト(汝弟)・ナビト(汝人)など、ノを介しないのが通例である。従って、ナイモに子音nの挿入されたものと考えるのが優れていると思われる。

(ii)は一般に、ニヒノアへの約とする説が行われている。しかし、ニヒ(新)を含む複合語は、ニヒムロ(新室)・ニヒハダ(新肌)・ニヒバリ(新蟹)など、ノを介しないのが通例である。従って、ニヒアへに子音nの挿入されたものとするのが優れているであろう。以上が、子音挿入かと疑われる事例であるが、いずれも母音連続を回避するという目的は果たされているとしても、その際にある特定の子音が選ばれる必然性というものは、一向に明確でない。右のような諸例は、子音挿入を考える以外に、解釈の方法がないものであるうか。

これについては、亀井孝(『ツル』と『イト』——日本語系統論のために——国語学16)のように、むしろ子音脱落を想定する立場があることを想起しなければならない。亀井は、

イネ↑ーシネ アメ↓ーサメ ウウ↓スウ ウツ↓スツ エ
(兄)↓セ

の例を挙げて、サ行子音のあるなしについて、サ行子音の現われないう形の方を、サ行子音の脱落したものと考えた。^(注1)

この論文では、脱落がサ行子音に限られるのかどうか明らかでなく、また、サ行子音のある形をない形にサ行子音の添加されたもの

と見る説を取らない理由が示されていないけれども、ここで子音脱落を想定するという考え方は、注目に値すると思われる。

一方、日本古典文学大系万葉集の頭注(一・一一三ペ)では、アハニを「サハニと同じ」とし、「このようにサ行頭子音の有無によって二つの類似語を形作る例」として、

イ(助詞)ーシ(助詞) ウウ(植)ースウ ウツ(葉)ースツ

などがあるとされている。ここでは、共時論的な語構成の問題として捉えられているようであって、発生的に見て無子音形と有子音形のいずれが原形であるかという点は、特に問題とされていない。

しかしながら、このような無子音形ー有子音形の対応という事実の存在が認められるならば、従来子音挿入と解されていた事例についても、これと結びつけて解釈することが可能であるように思われる。

従って、ここでまず必要な作業は、右のような無子音形ー有子音形の対応という事実がどの程度の範囲にわたって見られるか、該当の語例をできるだけ多く集め、これを整理するということであるう。

三

次の諸例は、上代および中古の文献において、語頭に子音を持つ形と持たない形との対応が見られるものである。できれば、上代の文献に範囲を限定したい所であるが、それでは語例が減少して、そこから何らかの結論を引き出すことが困難になるため、中古を含めて考えることにした。

カ行

(a) ア(彼)ーカ(彼)

。あの書き置きし文を(竹取・ふじの山)

山崎のあなたに(伊勢八二)

。加はたれどき(万葉四三八四)

加礼(万葉四〇四五)

(b) アソソニ(幽)ーカソケシ(幽)

。草枕旅を宜しと思ひつつ君はあらむと安蘇々二はかつは知れども(万葉五四三)

。可蘇氣伎(万葉四一九二)

アソソニは「うすうすと」「ほのかに」のような意であろうとされている。そうであれば、アソソニのアソは、カソケシのカソと関係づけることができよう。

(c) アル(離)ーカル(離)

。大魚よし鮪突く海人よ其が阿礼ばうら恋しけむ鮪突く志毘

(古事記・清寧)

あななひにおどろおどろしく、二十人の人の上りて侍れば、あれて寄りまうで来ず(竹取・燕の子安貝)

。妹が目可礼て(万葉三七三二)

アルは「離れる」「いなくなる」の意であるとされている。カルも同義であり、ラ行下二段活用である点も一致する。

(d) ウマシネ(人名)ークマシネ(人名)

。吉野人味稲(万葉三八五左注)

美稲(倭風藻)

。三吉野にありし熊志禰(純日本後紀)

右は同一伝説における同一人格をさす名称であると思われる。

サ行

(a) アク(開)ーサク(咲)

。開 アキス(金剛波若経集験記平安初期点)

。花は左該ども(孝徳紀)

アク(開)とサク(咲)とは、意義的に相当の距離があるようにも思われるが、見方によっては、サクはアクの特殊な一分野と考えられるのであり、「木花之左久夜毘売」(古事記・神代)を「木花之開耶姫」(神代紀)とも表記しているのは、その点、示唆的である。

(b) アハニ(多)ーサハニ(多)

。降る雪は安播爾な降りそ(万葉二〇三)

。人佐波爾来入り居り(古事記・神武)

アハニは孤例であって、語義の捕捉に問題があるが、文意から見て、サハニと同義と見てよいであろう。

(c) アス(止)ーサス(止)

。豊寿^{トヨシ}き寿きもとほしまつり来し御酒ぞ阿佐ず飲せささ(古事記・仲哀)

。言ひさしてやみにけり(伊勢八六)

古事記の例は、従来、諸説が出されているが、明解のない所である。境田四郎(「安佐麻之考」国語国文二卷一〇号)は、アスは「浅い状態にする」意の四段動詞浅スであるとし、「盃の酒がなくなつて底が現れるやうな状態にせず」の意、すなわちここは何杯も続けて飲めの意味であると解したが、いかにも苦しい解釈である。これに対して、土橋寛(日本古典文学大系古代歌謡集)は、アサズは「残さず」の意であるとする。それは、観智院本類聚名義抄

に「餐」字の訓としてアスがあり、「餐」は説文に「塞也」とある所から、アスは器の中に物を満たしておくことで、「アサズ飲セ」は「空っぽになるまで飲みほし給え」の意になるというのである。けれども、そのような語義を想定するについて、名義抄以外にきたる根拠がなく、また名義抄の訓義が必ずしも明確でない点、不安が残るものである。

ここで考えを転じて、アスを中止する意のサスと関係づけるならば、「中途でやめたりすることなくお飲みなさい」ということになり、文意としても無理がないように思われる。サスは、平安朝に複合動詞の後項としてのみ現われるが、このような語は、概して本来独立用法をもっていた場合が多く、その発生をかなり古い所においてよいかと考えられるのである。

(d) イ (代名詞)ーシ (代名詞)

。伊が作り仕へ奉れる大殿の内には (古事記・神武)

。旨が無ければ誰かかけむよあたら墨繩 (雄略紀)

(e) イ (助詞)ーシ (助詞)

。志斐伊は奏せ (万葉二三七)

。わが名之惜しも (万葉九三三)

(f) イ (息)ーシ (息)

。吹葉氣噴之狹霧 浮根于都羅伊浮岐能佐理 (神代紀・上)

。志長鳥猪名野を来れば (万葉一一四〇)

イフキは息吹の意であるが、とすれば、イは息の意と考えざるを得ない。イキ(息)はこのイ(息)を活用させた語の連用形名詞と見るべきであろう。

一方、シナガドリは息長鳥の意であると考えられている。なお、

風を意味する語にシがあつて、アラシ(嵐)のシもそれであるし、「科戸之風」(祝詞・六月晦大祓)などであるシナトも、シは風、ナは連体格助詞、トは所の意とされる。息と風とは、古くは結びつけて考えられたことが多かったようであるから、シ(息)とシ(風)とは同源である可能性が大きい。

(g) イヌ(去)ーシヌ(死)

。我が群れ伊那ば (古事記・神代)

。命志儼まし (雄略紀)

兩者、ナ変という極めて特殊な活用形式である所からも、何らかの関係が存在するであろうことが考えられよう。

広辞苑には、『しいぬ(息去ぬ)』の約か』と述べられているが、文献で見える限り、イキ(息)についてはタユ(糞)というのが普通であり、イヌ(去)と表現することがあったかどうか疑わしい。

また、桜井茂治は、「ナ行変格活用動詞成立論——アケセント史から文法史へ——」(国学院雑誌昭和47年9月)において、シヌ(死)を字音語シ(死)とイヌ(往)との連接としてとらえようとしているが、シヌのような基本的な、かつ古くから存する語が、字音語を含んでいるとは、容易に信じがたい。

一方、金田一京助(「国語の変遷」角川文庫八五ペ)によれば、シヌは、(シ)ヌ(死)イヌ(逝)であつて、「してしまいました」という言い方で、死去を表現したものである。これは「死」を畏れ忌む所から、直接言うことを避ける気持が働いたものと説明されており、一説として顧みるに価するものである。

しかし、シヌをイヌの意義の極めて特殊な一分野というように考えれば、これも無子音形—有子音形の対応として説明することが可

能である。

(h) ウウ(植)―スウ(掘)

。宇恵しはじめ(古事記・神武)

。須恵し種から(万葉三七六一)

スウは物体をある位置に固定させるといふ意味であるが、その対象が植物に限定されたのがウウであるということになる。ともにワ行下二段活用であるという点も一致するが、この型に属する動詞は他にウウ(飢)しかなく、所属語数の極めて少ない活用形式であるという点も注意してよい。

(i) ウツ(棄)―スツ(捨)

。脱き宇^{くた}三(古事記・神代)

。腐^{くた}し須都らむ(万葉九〇〇)

(j) ウヂ(氏)―スヂ(筋)

。大伴の宇治と(万葉四四六五)

。筋^{スチ} (高山寺本弥勒上生経贊平安初明白点)

ウヂとは一家の系統であり、系統は線状的に理解されるのが普通であるから、広く線状のものを意味するスヂと無関係ではないと思われる。

以上の他に、アマネシ(遍)―サマネシ(多)を対応例に加えることも可能かも知れない。けれども、アマネシのアマは、アマタ(数多)・アマル(余)・アマス(余)などのアマと共通のように思われるから、むしろアマネシがもとで、サマネシは、それに接頭語サが添えられたもの、すなわちサアマネシの母音脱落形と見た方が穏やかなように思われる。

タ行

(a) アツキナシ(術無)―タツキ(術)

。小豆奈九(万葉二五八二)

。末の多頭吉は知らねども(万葉二九八五)

アツキナシは普通、つまらない・益がないなどと訳されているが、日本古典文学大系万葉集・補注(三・四七〇ペ)には、

平安朝のアチキナシは、自分にはどうにもならないことに対して、仕様がなと思うとき、半ばあきらめ、半ば面白くなく思っ
て発する嘆きに似た感情をこめて使う。奈良時代のアツキナシもそれに同じく、すべて自分自身を自分でどうにもできない時に使っている。

と説明されている。アツキの意義をタツキと同様、手がかり・手段というに近いものと考えれば、(アツキ+無シ)は右の説明にも適合するであろう。

(b) アフ(敢・堪)―タフ(堪)

。置く露霜に安倍ずして(万葉三六九九)

。えたはず(土左・二月二七日)

アフは、本来、抵抗する・がまんする意であって、タフと隔たるものではない。

(c) ウム(績)―ツムグ(紡)

。宇麻ずとも(万葉三四八四)

。古記云(中略)都牟伎(令集解・宮糶)

紡豆無久(和名抄)

ウム―ツムグの関係は、ハル(晴)―ハルク(晴)、ユル(揺)―ユルグ(揺)の関係に比することができよう。

(d) ウキ(盞)―ツキ(杯)

。みづたま字岐（古事記・雄略）

。さか豆岐（万葉八四〇）

甄俗語云都岐乃波太（道円本和名抄）

ナ行

(a) アニ（豈）―ナニ（何）

。阿珥よくもあらず（仁徳紀）

。那爾か歎かむ（齊明紀）

アニとナニとが語頭子音の添脱の関係にある語であることは、すでに白藤礼幸（「ナとア」国語研究室4・東大国語研究室発行）の指摘があり、更に村山七郎（古代語アニ「豈」について）国語国文四〇巻一二号）に詳しい論がある。両者ともに、無子音形を原形と見る立場をとっているが、いずれが原形であるかはともかく、両語が無縁のものでないことは認めてよいであろう。

(b) アカツノミコト（神名）―ナカツヲノミコト（神名）

。赤土命（神代紀・上）

。中筒男命（神代紀・上）

同一神が小異のある名称で呼ばれている場合である。神名のようなのは、神格に対する古代人の解釈の推移に伴ない、語形が変改されることが十分考えられるから、単なる音韻変化として処理することには問題もあるが、一応ここに含めておく。

(c) アフナアフナ（随分）―ナフサナフサ（随分）

。随分 ナフサナフサに（南海寄帰内法伝平安後期点）

。あふなあふな思ひはすべしなぞへなく高く卑しき苦しかりけり（伊勢九三）

アフナアフナは、源氏物語などに見えるオホナオホナとの関係な

ど、問題のある語である。ただ、アフナアフナは、伊勢物語・真名本では「随分」の字があてられており、ナフサナフサとの親近関係が存するようで、「身分相応に」といった意味であろう。語源は明らかでないが、ナフサナフサのサ、およびアフナアフナのナはおそらく接辞で、中心的な意味は、ナフ・アフにあると思われる。なお、オホナオホナはこれと関係なく「ひたすらに・はなはだしく」の意で、むしろ「われも思ふ人もな忘れおほなわに（多奈和舟）浦吹く風の止む時なかれ」（万葉六〇六）に見えるオホナワニと関係があるのではなからうか。

(d) ウシ（大人）―ヌシ（主）

。大人 于志（神代紀・下）

。あが農斯の（万葉八八二）

この両者が意味的に近いことは、これまでにもしばしば言われている。

(e) ウバタマ（黒玉）―ヌバタマ（黒玉）

。うばたまの（古今集・四四九）

。奴婆多麻の（古事記・神代）

(f) オク（置）―ノク（置）

。我が淤岐し剣の太刀（古事記・景行）
。いかなるや人にいませか石の上を土と踏みなし足跡乃那るらむ貴くもあるか（仏足石歌）

阪倉篤義（「語構成の研究」一八七ペ）は、「いと乃伎て短き物を端きると」（万葉八九二）などのノクは、「とり分ける」意の動詞であり、一つのを他の一般から「とり分ける」ということは、やがてまた、それを特に保存すること、遺すことに通ずるとして、

仏足石歌の例は「残す」意であるとしている。ただし、「とり分けら」と「残す」とを比較すると、前者はとる方に重点があり、後者はとらざる方に重点があつて、いわば正反対とも言えるのであり、一語の意味変化として、やや不自然に感じられる。イトノキテのノクは、阪倉も言うように、ヌク（抜）と母音交替の関係にあるようであり、ヌク（抜）と同義と見て、ほとんど支障がない。

一方、仏足石歌のノクは、明らかに「後に留め置く」の意であるが、オク（置）にも、

愛しき吾が若き子を飢岐てか行かむ（斉明紀）

のような用法があつて、ノクはオク（置）と関係づける時に、自然な解が得られるように思う。

八行

(a) アララ（粗）―ハララニ（散）

。阿羅々松原（神功紀）

。海人小舟波良々爾浮きて（万葉四三六〇）

いずれも散在するさまである。アラを語基とする語にはアラク（散）が、ハラを語基とする語にはハララク（散）・ハララカス（散）がある。ただし、アクセントについては言えば、観智院本類聚名義抄には「散アラク（平上〇）」「散帰アラカケル（平上上〇〇〇）」とあり、また「壤ハラ、タ（上上〇〇）」とあるから、金田一春彦の所説「ある語が高く始まるならば、その派生語・複合語もすべて高く始まり、ある語が低く始まるならば、その派生語・複合語もすべて低く始まる」（『国語アクセント史の研究が何に役立つか』言語民俗論叢）に従えば、アラクとハララクとは、直接の関係がないことになるが、ハララクのアクセントを示す証拠は右の一例しかないから、そ

の点確實でない。なお、アラクのアラをアラシ（荒）・アラス（荒）などのアラと結びつける説もあるが、アル（荒）も含めて、いずれも高く始まる型であつたから、金田一説に従うかぎり、やはり直接の関係はないことになる。^{（注2）}

(b) アメノアカルタマ（神名）―ハカルタマ（神名）

。天玉（神代紀・上）

。羽明玉（神代紀・上）

同一神格が多少異なる名称で呼ばれている場合である。

(c) アブル（溢）―ハブル（溢）

。溜（夫） 溢也弥知阿失留（天治本新撰字鏡）

。池水溢とも（万葉二八三三）

瀧 ハフル（観智院本類聚名義抄）

両者ともブの清濁には問題がある。アブルは下二段である。ハブルは四段活用とされるが、崇神紀古訓には「溢ハフレタリ」とあるから、下二段活用も存在したのではなからうか。

(d) イタ（甚）―ヒタ（直）

。伊多泣かば（古事記・允恭）

。頓丘 毗陸鳥（神代紀・下）

イタとヒタとの関係を指摘したものには、阪倉篤義「語構成の研究」（二六八頁）があるが、更に村山七郎（『原始日本語の教詞イタ』）について『国語学86』が詳しく論じている。なお、村山は、イタを先行し、ヒタを後出としている。

(e) イスカシ（恨）―ヒスカシマ（恨）

。伊須賀志態を（続日本後紀）

。狷ヒスカシマにして（石山寺本大智度論元慶点）

(f) ウツ (全)ーフツマニ (悉)

。全剝宇都播伎 (神代紀・上)

。片思ひを馬に布都麻爾負ほせもて (万葉四〇八一)

フツマニの語義については、阪倉篤義の「語構成の研究」(二〇ペ)に詳しい。このフツとウツとは意義的に相当近いと思われる。

マ行

(a) アス (在)ーマス (在)

。遠つあふみ引佐細江のみをつくし我を頼めて安佐ましものを (万葉三四二九)

。大倉は千歳に麻佐む (万葉二四三)

かつて、マスと同義のアスなる敬語動詞が存在したであろうことは、別の所(「平安時代語の源流について」東京大学教養学部人文科学科紀要48輯)で詳しく論じたことがある。取ラス・立タスなどの言い方は、取ル・立ツの連用形にアスがつき、一方の母音が脱落したものと考えられるのである。ただし、前稿では、マスは身(mi)アスあるいは身(mu)アスのつづまった形というふうにかえたが、マ行頭子音の有無による対応という事実を認めるならば、これもその一例と考えられるであろう。右の万葉集のアスの例は、東歌であるが、取ラス・立タス式の言い方は上代文献に広く現われるから、奈良時代以前には、中央語としてもかなり使われていたと推量される。

(b) イカ (敵)ーミカ (敵)

。曠塩 (播磨風土記)

。彌箇始報 (仁徳紀)

ただし、ミカシホはイカシホに接頭辞ミのついた形と見る余地はある。

(c) イツツシ (敵々)ーミツミツシ (敵々)

。伊豆都志伎 (祝詞・大殿祭)

。美都美都斯 (古事記・神武)

(d) イマソカリ (在)ーミマソカリ (在)

。藤原の常行と申すいまそかりて (伊勢七七)

。多賀幾子と申すみそかりけり (伊勢七七)

両語とも語源が明らかでないが、マ行頭子音の有無による対応と見ることができる。

(e) ウゴロモチ (颯風)ームグロモチ (颯風)

。颯風 宇古呂毛知 (本草和名)

。媒駭 牟久呂毛知 (天治本新撰字鏡)

観智院本類聚名義抄にはウグロモチという形が出ており、この方がムグロモチにより近いものである。

(f) ウシロ (席)ームシロ (席)

。伊奈宇之呂 (万葉一五二〇)

。伊儺武斯廬 (顯宗前記)

。席ムシロ (靈異記下三〇)

(g) ウダク (抱)ームダク (抱)

。抱有太加之□ (興福寺本靈異記上三〇)

。かき武太伎 (万葉三四〇四)

。抱牟太久 (新詠華嚴經音義私記)

(h) ウナギ (鰻)ームナギ (鰻)

。武奈伎 (万葉三八五三) (万葉三八五四)

。缺ウナキ（観智院本類聚名義抄）

(e) から(h)までは、(へうゝ)と(へムゝ)との対応であるが、この場合、その表記が示す実際の音価が何であったかという問題がからんで、実はむずかしい。というのは、平安時代には「うまゝむま」「うめゝむめ」「うべゝむべ」「うばゝむば」など、語頭が「う」とも「む」とも表記された語群があり、これらとの関係がどうなるかという問題があるからである。ここでは、第二音節がマ行音またはバ行音の場合は、本来母音であったものが、直後のmあるいはbに同化されて、meaとかebeとか発音されるようになり、語頭のuが「う」と、mが「む」と表記されていると考え、この類には含めなかった。それに対して、第二音節がマ行音・バ行音以外の場合は、ウ表記・ム表記の差が、そのままuとmuとの音韻の差を表わしていると考えて、ここに列挙したわけである。

(i) オミ(植物名)ーモミ(植物名)

。み湯の上の樹群を見れば臣木も生ひ継ぎにけり(万葉三二二)
。縦毛美(和名抄)

万葉集などのオミノキがモミのことではないかということは、これまでも指摘された所である。

ヤ行

(a) ウツル(移)ーユツル(移)

。宇都里ゆく(万葉四四八三)
。由都利なば(万葉三三五五)

ユツルは、ウツルには接頭辞イのついたイウツルの約ではないかという説もあるが、そのような音韻変化は他に類例を求めがたいから、ここに入れておく。もっとも、類例がないという点では、ヤ行

頭子音の有無による対応の例も、他には見出だせない。

ワ行

(a) ア(吾)ーワ(吾)

。阿はもよ(古事記・神代)
。和が着せる(古事記・景行)

(b) アカツ(散)ーワカツ(別)

。散アカチ(金剛波若經集驗記平安初期点)
。拆和加知天(靈異記下序)

アカルーワカルの関係も同類であろう。アカルに対してサカル(難)を対置すれば、サ行頭子音の有無による対応ということになるが、アカル・ワカルは下二段であるのに対して、サカルは四段であるから、アカルーワカルの対応を認めるべきであろう。

(c) アタリ(辺)ーワタリ(辺)

。阿多里(古事記・仁徳)
。東の五条のわたり(伊勢五)

四

以上、無子音形と有子音形の対応と思われる事例を列挙した。両者の意義的な関係は多様であって、両者に意義の差がほとんど感じられない場合、また両者の意義が微妙にずれている場合、また前者の意味領域のうち特殊な部分を後者が荷なっていると思われる場合、またその逆の場合などがある。ただ、このように語形が相近く、また意義的にも近似したそれぞれ一対の語が、互いに無関係に生成したとは考えがたい。

そこで、その関係はいかなる関係であるかということであるが、

結局、問題は、前者が後者から頭子音の脱落したものであるのか、それとも後者が前者に頭子音の添加されたものであるのかということにしばられるであろう。ただし、その問題は、にわかに決めがたい所がある。

たとえば、文献に初出する順序という点も一応問題になる。しかし、両者の文献的な先後関係や、現われる資料の文体的な性質は一律でない。文献に登場する順序が、語形の生成する順序と一致するという保証はないから、文献の新旧に基づいて語形の新旧を判定するというようなやり方はとることができない。

また、語源や用法を考慮することにより、語形の新旧を決定することができるときもありそうに思われる。たとえば、ウバタマ^マヌバタマの關係について、佐竹昭広(『古代日本語に於ける色名の性格』國語国文二四卷六号)の所説によれば、ヌバタマのヌバはヌマ(沼)と結びつけ得るものであり、《沼、泥》より《黒》へ意味変化を起こしたものである。これに従えば、ヌバタマの方を原形とするのが正しいことになるが、再び考えるならば、この説そのものがヌバタマの方を原形とすることによって成り立っているようであり、語源説を根拠に語形の新旧を決めようとするならば、我々は循環論に陥りかねないのである。

これに比すれば、用法の考察に基づく推論は、まだしも確実性があるように思われる。たとえば、山田孝雄は「奈良朝文法史」(五五ペ)において、代名詞のア(アレ)とワ(ワレ)との關係について、ア系を古い形、ワ系を新しい形と推定した。というのは、アにはアギ・アゴ・アセなどの熟語があるのに対して、ワには上代には一つもそのような熟語がない。ところで、万葉・記・紀・宣命

を調査すると、ワ(ワレ)と訓むべき確証のあるものが二七一例、ア(アレ)は一三二例である。そこにワ系の勢力の強さを見ることのできるが、その用例の多いワに熟語がないのは、その語のなお若かったことを示すものであり、アに熟語があつて、しかも用例の少ないのは、その語の古いことを示すものではないかというのである。

まことに整然たる議論であるが、右をそのまま發生の新旧として理解することが許されるかどうか疑問である。仮りに、ワ系が先に、続いてア系が發生したとする。その場合、まずア系の方が勢力を伸長し、後にワ系がこれにとって代わるといふようなことは、全くあり得ないことであろうか。

上代文献に見える連体の格助詞には、ノ・ガ・ツなどがあるが、このうちツは上代においてすでに衰退気味であつて、ノ・ガに比して用法が極めて限定され、やがて衰滅する。しかし、そのことから、ツはノ・ガよりも發生の時期が古いと言えるであろうか。用法の問題を語形の發生の新旧に置き換えることは、やはり危険なことというべきであろう。

すなわち、語源や用法によって、個別的に考察して行こうとする方法は、かなり不確実なものと思はれるのである。

ところで、無子音形—有子音形の対応という現象が、各行によって、数量的にかなり偏りが見られるという事実を見逃すべきではないであろう。これを行別に整理すると、次のようになる。

4+1	カ
10+4	サ
4+1	タ
6+2	ナ
6	ハ
9	マ
1	ヤ
3	ワ

大きな数字は、無子音形—有子音形の対応として挙げたものの例数であり、小さな数字は、子音挿入と解されたものの例数である。

ただ、古代日本語にかなり広く、無子音形—有子音形の対応という事実が認められる以上、ハルアメーハルサメなどいわゆる子音挿入例も、おのずから無子音形—有子音形の対応の事例の中に解消されるべきものであろう。従って、大数字と小数字とは本質的に差のないものとして、合算することが許される。

5	カ
14	サ
5	タ
8	ナ
6	ハ
9	マ
1	ヤ
3	ワ

さて、この行別による例数のバラツキは、各行所属語の異なり語数の多少に関係するのではないかと、まず疑ってみるのが常道である。そこで、一応の目安として、今、時代別国語大辞典・上代編に立項された項目数を数えてみる。

1900	ア
1413	カ
959	サ
1075	タ
525	ナ
931	ハ
942	マ
564	ヤ
16	ラ
308	ワ

右のうち、ア行・ラ行は当面の問題に関係はないから、除くとすると、所属語の多い順は、

カ・タ・サ・マ・ハ・ヤ・ナ・ワ

となる。これに対して、対応例では、

サ・マ・ナ・ハ・カ・タ・ワ・ヤ

の順であり、所属語数の多いものが対応例数も多いというように単純には言えないようであって、何か別の原理が支配しているのでは

ないかと思われる。

そこで、例数の大小を、頭子音の性質という点から考え直して見る。ここで、ハ行子音を p とするならば、次のように並んでいることになる。

14	s
9	m
8	n
6	p
5	t
5	k
3	w
1	j

この配列には、有意味性が感じられる。すなわち、最初に摩擦音系 s、次に鼻音系 m n、第三に破裂音系 p t k、最後に半母音系 w j という順序になっていることがわかるのである。

全体に例数もさほど多くなく、また追加すべきものや、逆に削除すべき例の出で来することもあり得るから、この順序がどこまで確定的なものかという疑点は残ろう。また、右は対応例の実数の順序であって、各行所属異なり語数との比率による順序ではない点も、問題といえば問題である（ただし、各行所属異なり語数に比して対応例数が余りに小であるから、その比率をとっても、比較する際に有意な数字とは言えなくなる）。

右のような疑念は捨てないにしても、摩擦音・鼻音・破裂音・半母音という調音の仕方による差異と、対応例数の差との間に、整然とした対応があるように見えることは、やはり注意すべきことであろう。

そこで、摩擦音・鼻音・破裂音・半母音という順序が何を意味するかであるが、筆者は、これは発音上の緊張度の低いものから高いものへの順序ではないかと思う。

摩擦音は、流れ出る呼気に対して口むるなどの調音器官が狭いせ

ばめを作って生ずる音であるのに対して、破裂音は口むろに閉鎖が作られ、同時に鼻むろへの通路も閉鎖される。また、鼻音は、口むろに閉鎖が起ると同時に、鼻むろを通して呼吸が流れ出す音である。こうして見ると、摩擦音・鼻音・破裂音の三者のうちでは、調音上最も緊張を要するのが破裂音であり、次に鼻音、そして摩擦音の順であると考えられる。

さて、半母音であるが、右の順序から言えば、これが最も発音上緊張を要する音では必ずである。半母音が発音上緊張を要したのは、古代日本語がCV構造を基本としていたことと関係があるのではないかと思われる。すなわち、CV構造であるということは、母音連続を嫌うということである。ところで、半母音は、調音的には母音と同様であって、ただ音節副音をなすものであるというに過ぎない。従って、半母音を含む音節は、音声的には母音連続に極めて近くなるから、これを明確に発音するには、かなりの緊張を要したのではないかという考えが成り立つ。

とすれば、この順序は、やはり全体として、発音上緊張度の低いものから高いものへの順ということになる。このように考えると、有子音形が先で、無子音形が後、すなわち子音脱落の現象が考えやすいであろう。なぜならば、調音的に緊張度の高い子音は、意識的に明確に発音しようとするため、脱落が生じにくいのに対して、逆に緊張度の低い子音は、発音もずさんになりやすく、脱落しやすいということが考えられるからである。

一般論的に見て、子音脱落ということは考えやすいが、子音が新たに付着するというようなことは考えにくい。もし、付着するとしたら、それは一種の接頭辞ということになるであろうが、子音一個

の接頭辞が存在し得るのは、閉音節語の存在を許すような言語においてであろう。勿論、日本語がかつて閉音節語の存在を許す言語であった蓋然性は零ではない。しかし、それは文献時代をよほど逆上った時期でなくてはならない。もとより、それがいくら古い時代のことであろうと、一応構わないわけである。ただ、その接頭辞は、どのような意味あるいは機能を有したものであろうか。接頭辞である以上、それらの語群におけるそれぞれの頭子音は、何か共通の意味なり機能なりを有していなければならないはずであるが、そのような意味あるいは機能が考えられるであらうか。

これに比すれば、子音脱落の方は、までも考えやすい。CV構造を基本とする言語においては、最も脱落しやすいのは語頭子音である。それ以外は、どの子音ないし母音が脱落しても、子音連続・母音連続または閉音節が発生するからである。

なお、この脱落現象がいつ起こったものかは明らかでない。文献時代以前に起こったもので、上代や中古の文献に見えるのは、そういう前代の音韻現象の痕跡に過ぎないという可能性も考えられるからである。上代・中古の文献で見える限り、そのような例は決して多いたとは言えず、脱落が盛んに行なわれた時期があったとしたら、それは文献時代以前を考えるのが順当であろう。

ハ行子音をpと仮定したのは、そうすると破裂音になり、tやkと並ぶことになって、都合がよいからである。ただし、現在の通説では、ハ行子音は、上代・中古ではFという両唇摩擦音であると考えられている。とすれば、このような音韻現象が行なわれたのは、ハ行子音がまだpであったころ、すなわち上代以前であったということも考えられるのである。^(注3)

五

以上、子音挿入という従来の解釈に疑問をもつことから出発して、日本語にかつて語頭子音の脱落という現象が行なわれたことがあったであろうことを、推定するに至った。

村山七郎は、前にも触れた論文の中で、アニーナニ、イターヒタの関係について、比較言語学的な立場から、後者は、前者をもととして、*コー*、*ロー*なる接頭辞がそれぞれついたものと解した。しかし、もしそのような解釈がそれらの断片的な事例の解釈にとどまるならば、やはり説得力に乏しいと言わざるを得ない。

従来からある子音挿入という解釈についても、ハルアメ(春雨)

√ハルサメの場合は、発音上最も緊張度の弱い、その意味で発音労力の軽微な*s*を挿入したものと考え、一方、ナイモ(汝妹)√ナニモについては、語頭子音*n*の同化作用を受け、挿入子音として*n*が選ばれたものと考えるところに、一々について説明方法を変えて行くようなやり方は好ましくない。すなわち、語頭子音脱落という解釈は、可能な限り統一的な説明方法を求めるという方針の一つの結果なのである。

さて、ハルサメについて言えば、サメはアメに先行する語形であると見られる。そして、複合語中に古い語形が保存される例は、決して稀でない。これを共時的に見れば、アメは独立形、サメは非独立形として、機能分担を行なっていることになる。この機能分担によって、両者は長く共存することができた。一方、アク(開)とサク(咲)とは、意味分担を行なうことによって、やはり共存し得た。もし、意味的にも機能的にも大差がなければ、長く共存するこ

とは困難であるに違いない。

そのようにして対応形の一方が減びるという可能性を考慮に入れるならば、対応例の少なさは、決して脱落現象自体の少なかったことを意味するのではなく、一方が減びたために対応例として揃えることができないうに過ぎないのかも知れない。

注

(1) 亀井の挙げた例のうち、エーセの例は、エ(兄)がヤ行のエであるから、この場合、ふさわしくないとと思われる。このことは、すでに村山七郎『亀井孝』『ツル』と『イト』を讀みて『国語学20』の指摘がある。

(2) 金田一のいう式保存の法則は、自身もいうとおり、「万能力のものではない」(「去声点ではじまる語彙について」『国語学93』)のであるから、必ずしも鉄則的に考える必要はないであろう。たとえば、アラシ(嵐)のアラは、常識的に言って、アラ(荒)ではないかと思われるが、アラシ(嵐)は、図書寮本および観智院本名義抄によれば、平平平型であつて低く始まる型である。従つて、アラ(荒)とは関係ないことになるが、これなども一つの例外と見てよいかも知れない。

(3) ハ行子音のほかに、サ行子音の音価にも問題がある。すなわち、摩擦音[s]あるいは[ʃ]か、破擦音[ts]かという問題があるからである。ただ、仮りに破擦音だったとしても、論旨に変更を加える必要はないように思う。

付記 本論の趣旨は、昭和四十七年秋の国語学会で発表した。

— 聖心女子大学助教授 —